

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
原 冴美 (旧姓 杉山)	女性	13歳	豊橋市 (豊川市一宮町)

「チチハルの記憶 ～ 満州から苦難の引き揚げ」

大陸の町“チチハルへ”

私たちが満州へ渡ったのは、昭和15年の冬でした。北満州鉄道の職員として1年前に出かけた父の元へ、母と子ども4人（兄・私・妹・妹）の大旅行でした。出発時は、迎えに来た父との再会や未知の土地への楽しみがありましたが、チチハル駅へ降りた時のひどい寒さは本当に想定外でした。先が思いやられました。

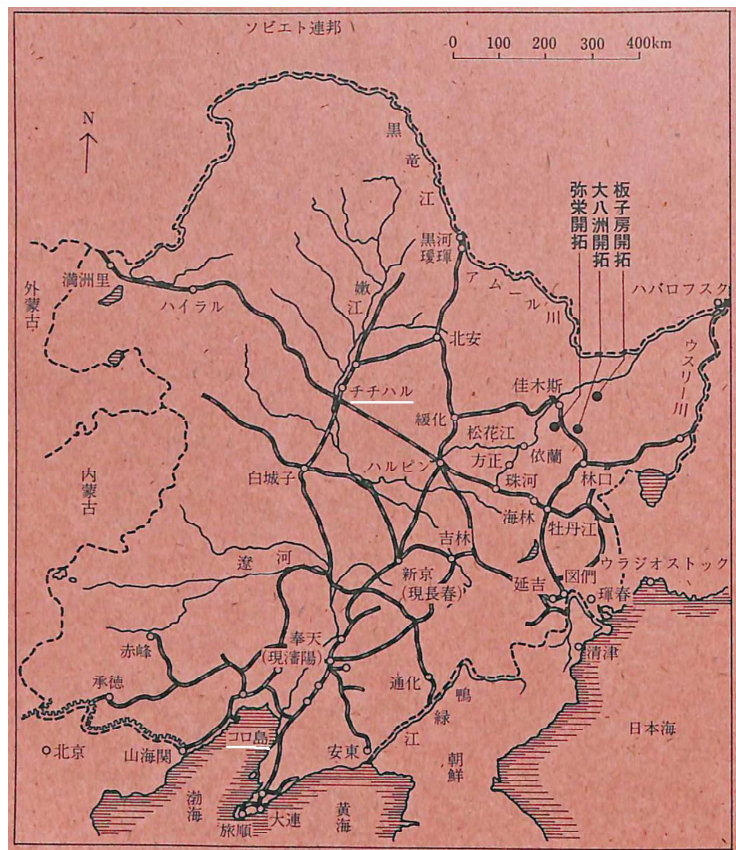
家は思ったより広く、ペチカもあって家族みんなで暮らすことに不足はありませんでした。毎日の暮らしも、結構ゆったりしていて物資も豊富でした。特に、内地では少なかった毛皮製品（防寒で必要）が目につきました。

その平穏な毎日が一変したのは、終戦直前のソ連軍の満州侵攻でした。8月9日の参戦、15日に内地は終戦を迎えましたが、満州各地ではしばらくの間戦争が続いていました。毎晩のように空襲警報が鳴り、母は仕事の父に代わってその度に夜警に出かけていました。体調を崩して母が倒れたのはその頃でした。

私たちは、それから1年間チチハルに留まりましたが、幸いなことに住居を失うことはありませんでしたし、近所の満州人の人達ともいざこざは起こりませんでした。

しかし、ロシア兵が土足で踏み込んできて、時計や貴金属を奪われたことがありました。兵士たちは、腕にいくつも時計をはめていました。

特に困ったことは、銀行が閉鎖されてお金が引き出せなくなったことでした。パン作りのうまかった父が、自家製のアンパンを作り、それを私が街角に立って地元の人達に



売って、わずかなお金をいただいたことも何回かありました。近所の人はタバコを作って売り、現金を得ていました。

母は肝臓かんぞうを悪くし、体調が日ごとに悪くなりましたが、病院は接収せつしゆうされてなくなり、治療ちりようしてもらおう所がありません。父は医者いさを必死ひじになって捜し、母を戸板かに乗せて医者いさの家まで運びました。そのうち医者いさが根負けして家に来てくれるようになりましたが、母は腹膜炎ふくまくえんになり、尿にようが出なくなり、お腹なかがポンポンにふくらんでしまいました。治療する道具ぐさがなかったので、パイプごすんくぎに五寸釘ふくすいを取り付けた道具ぐさを作りました。それをお腹なかに突き刺して、パイプでたまった腹水ふくすいを出すようにしました。薬はもちろんありません。治療らしい治療はまったくできませんでした。母は想像くつうを絶する苦痛くつうに耐えていたはずですが、子どもの私わたしたちには気丈きじように振る舞まっていました。しかし、そのうちに普通ふつうの姿勢しせいで寝られなくなり、起き上がってもたれるようになりました。

家庭の医学という本まんじゆしやげに曼珠沙華まんじゆしやげ（ヒガンバナ）の根すいじやくが効くと書いてあるのを読み、根すいじやくがほしかったのですが手に入りませんでした。衰弱すいじやくした母は10月28日、32才で息を引き取りました。最後まで家族おきなの行く末を案じ、幼い妹おきなを心配しながら早すぎる別れとなりました。死ぬ間際の、母は手を伸ばして妹おきなの手を取ろうとしました。その時の光景わすは今も忘れることができません。今でも曼珠沙華まんじゆしやげを見ると、母のことを思い出します。

母の死後けつかく、私はやせこけてしまい、オバケのようになってしまいました。結核けつかくなのか肋膜炎ろくまくなのか分かりませんが、お医者さんが家の中にはダメだ、外に出て栄養えいようのあるものを食べなさいと言われ、飼っていたニワトリたまごの卵たまごを食べるようにして、何とか命をつなぐことができました。

昭和21年秋、帰国へ

ちょうど1年後の秋、父が「帰国の準備をするように」という、満鉄の知らせをもらってきました。指定された列車に間に合わせるために、大急ぎで移動の純備ひぞくを始めました。いろいろなうわさを聞きました。先に出かけた人達おそが匪賊ひぞくに襲おそわれたとか、若い娘わかが人むすめさらいに奪うばわれたとか、私たちの帰国かみが大変なことになると感じていました。それで若い娘わかさんたちは髪かみを切って帽子ぼうしをかぶり、女おんなに見られないようにしました。私たちはまだ子どもでしたので、男子の帽子ぼうしをかぶっただけでした。

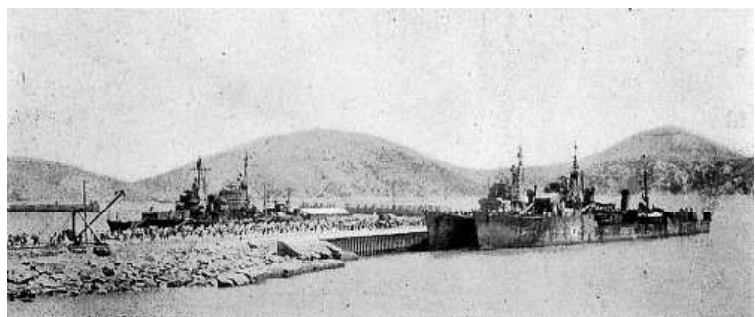
持ち物制限いつしよの中に〔二人以上の写真とは不可〕というのがあり、母と一緒に撮とった家族写真あつかの扱こまいに困こまりました。何をおいても、それだけは持つて帰ることが私たちの役目だれだと、家族だれの誰だれもが思おもうっていましたから、結局こつ、写真を母のお骨こつの箱こつの底しに敷しき、持ち帰もることにしました。

チチハル駅で私わたしたちを待まちっていたのは、貨物列車むがいしやの無蓋車むがいしやでした。何百人とい

う大きな引揚げ団の一員として、チチハルを離れました。列車が止まると中国人たちが近づいてきて、いろいろなことが起こりました。

- ・荷物を下に置くと取られる心配があり、できるだけ抱えるようにしていました。母の遺骨を入れた箱は、何かいいものが入っていると思われるためか、何度か取られそうになりました。
- ・列車は昼間コウリヤン畑の中を走り、夜は駅の近くで全員が野宿でした。家族でかたまって仮寝をしましたが、頭の上を弾丸が飛び交った駅もありました。中国の内戦が続いていたためです。
- ・私の兄が用足し（トイレ）のために外へ出て、そのまま行く方の分からない人もいました。私は中国人から靴を置いていけと言われましたが、もっといい靴に履き替えてくるからと言ってその場を逃れました。
- ・私が用足しに行った所は、洗面所があったので駅だったと思います。その時私は、父が亡くなった母に贈ったダイヤの指輪をしていました。手を洗う時にその指輪はずし、置き忘れてしまったのです。列車の出発に遅れないように焦っていたんだと思います。急いで引き返しましたが、もうありませんでした。父は厳しい人でしたが、なぜか私を叱ることも責めることもませんでした。大切な母の形見だったのに、「そういう運命だったんだよ。」と父が話したことを記憶しています。
- ・列車が止まる度に、小さな事件が起こりました。現地の男の人が来て腕時計を要求したり（その腕には、すでに2個の腕時計があった）、靴を履き替えさせられたり、戦争に負けるとどうなるか思い知らされました。
- ・途中、食事をどうしたのか覚えていませんが、兄の話では一人3千円（帰国費用）が許されており、それで食べ物を買ったのだと・・・
- ・どこを列車が走ったのか分かりませんが、朝鮮半島を南下した記憶はありません。何日もかかって港町に着きました。“コロト”（葫芦島、壺芦島）という名前だけを覚えています。

無事に貨物列車の旅を終えた私たちを待っていたのは、アメリカの大きな揚陸艦（人や物を運ぶ上陸用軍艦）でした。本来は戦車や装甲車がのる場所で、雑魚寝でしたが、引揚げ列車にはないほっとするものがありました。敵であったアメリカの船だというのにです。その揚陸艦の中で、亡くなった人が何人かいたという話を聞きました。海に捨てられた（葬られた）そうです。もうすぐ日本に戻れるというのに、何とも気の毒なことでした。



コロ島の揚陸艦と引き揚げの人々

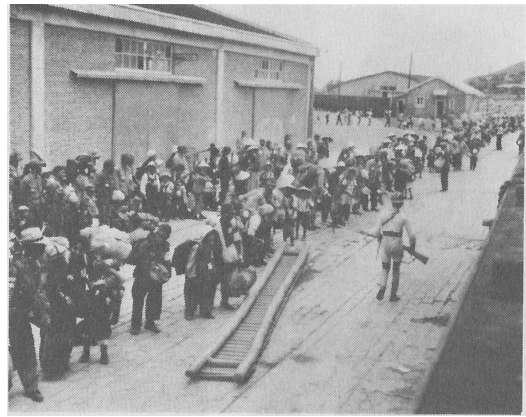
それを思えば、母は火葬^{かそう}されて遺骨^{いこつ}を持ち帰ることができ、まだよかったですと思います。

九州の佐世保港^{させぼこう}に着いて、「引揚証明書^{ひきあげ}」をもらったときから、新しい試練が始まりました。母の実家の一宮町豊津^{とよつ}に身を寄せました。実家の祖母^{はたち}は、二十歳前後の息子二人を戦争で亡くしていたこともあり、母の帰りを待ちわびていたようです。しかし母がいなかったものですから、祖母はひどくがっかりされました。他の身内もいるの

で、私たちは肩身^{かたみ}が狭い思いをして過ごすことになりました。それでも祖母の好意もあって、手づくりのスカートをはいて私は新城高女^{とちゅう}に途中入学をしました。それから6年、“母のない子”を時に感じながら、桜の丘^{おおか}の学校で思い出深い日々を学ばせていただきました。

今思うと、父親は4人の子どもを連れて、よく無事に引き揚げ^{ひ あ}てこれたものだと思います。一番下の妹は小学校1年生で、小さな体で荷物を入れた大きなリュックを引きずるようにして運んだのです。みんな精いっぱい^{せい いっぱい}の荷物を運んだのです。親子が離^{はな}ればなれになることが多かったのですが、私たちはみんなそろって帰国することができて、本当に幸せなことだと思いました。

帰国してから、ラジオで満州から行方不明^{たず}の子どもを尋ねる放送^{く かえ}が繰り返されたことを思い出します。父は私たち子どもがみんなそろって帰国できたことを、死ぬまで感謝^くしていました。私たち4人の兄弟姉妹は、今も元気で暮らしています。いっしょになると、当時のことを思い出しては話をしています。そんな平穩^{へいおん}な日々^{日々}に心から感謝しています。



コロ島の棧橋で乗船を待つ人々